



人と人の繋がりを胸に 雷との共生へ挑み続ける

よしだ かめ たろう
吉田 亀太郎 (1897~1986年)



■音羽電機工業 株式会社

本社所在地：兵庫県尼崎市名神町3-7-18 従業員数：282名 資本金：8,190万円
設立：1946(昭和21)年5月11日
事業内容：避雷器、耐雷トランス等のサージ対策製品、その他耐雷関連製品、セラミックスの開発・製造・販売
およびエンジニアリング事業 (雷保護のコンサルティング、電気工事一式および保守管理)

独立へ繋がる碍子メーカー時代

空を走る雷は、古来より信仰や畏怖の対象とされてきた。ある地域は全知全能の神の武器として、ある地域は天の怒りとして、日本では「ヘソをとられる」という民間信仰などと共に人々の意識の中に深く刷り込まれている。一方で、電気器具が発展した現代では、雷は様々な事故や危険を引き起こす存在であり、日々の暮らしに欠かせない明かりや電気を脅かすものとして、信仰とはまた異なる意味で恐れられている。後の音羽電機工業(株)創業者・吉田亀太郎も、幼き日には停電した家の暗がりの中で、遥か上空の稲光を、恐れおののきながら見上げていたかも知れない。

亀太郎は、日清戦争が終結して間もない1897(明治30)年に生まれた。大阪市北区堂島にあった関西商工学校電気科夜間部を卒業すると阪神急行電鉄(株)を経て、京都の碍子(絶縁体)メーカーである松風工業(株)に入社し磁器碍子の営業に従事した。第二次世界大戦中に営業所長として京城府(現・韓国)へ赴任し、そのまま現地で終戦を迎えた。1945(昭和20)年12月、京城府より家族と共に無事に帰国した亀太郎だったが、勤めていた会社の閉鎖が決定し、家族を抱えながら暗中模索の日々を過ごすこととなった。



1960年代初頭の頃の亀太郎(一番右)
独立後、ヒット商品に恵まれ経営が上向いてきた頃。

会社は社員みんなのもの

1946(昭和21)年、戦後の混乱が続く京都・東山で、亀太郎はこれまで築き上げてきた電力会社・鉄道会社との信頼関係や、碍子磁器の知識をもとに、自ら新会社を旗揚げすることを決意した。古い知己の暖かい支援あって、電力会社から引込安全器といった製品の製造権および販売権を獲得することができた。ただ、会社設立が具体性を帯びていく中で、亀太郎は自社の社名について悩むこととなった。

「やはり自分の名前から『吉田電機』などとするのが筋なのだろうか。しかし、会社や事業は私個人のものではなく、そこで働く社員全員のものであってほしい」。創業に際し、そのような想いを抱いていた亀太郎のもとへ、五条坂に住む恩師が訪ねてきた。社名のことを相談した亀太郎に、恩師は「音羽」という名前を提案した。それは、悠久の時代から今に至るまで清水寺に流れ続ける「音羽の瀧」からとったものだった。『音羽山から絶えず流れる瀧のように、永く続く会社にしていきたい』。

「音羽」という名前こそが自分の立ち上げる会社にふさわしいと感じた亀太郎は、1946(昭和21)年5月11日、京都市東山区五条坂に会社を設立し、名前を(有)音羽電器製作所と名付けた。吉田亀太郎、49歳の時であった。



音羽の瀧
「延命長寿」「恋愛成就」「学業成就」の御利益でも有名。

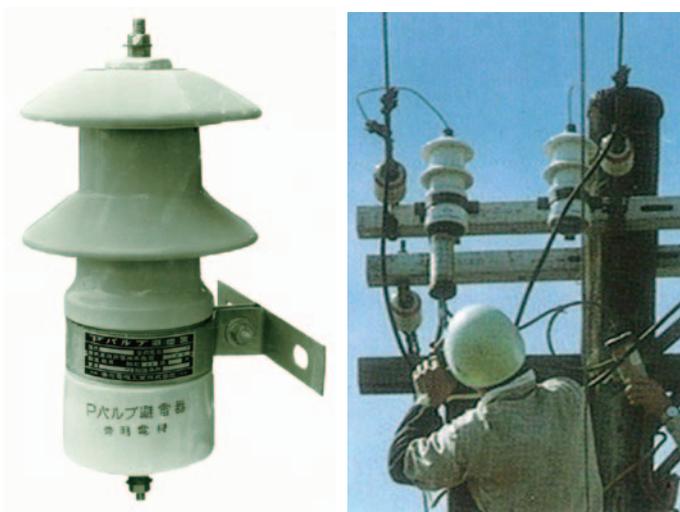
「雷対策専門メーカー」の第一歩

当時、日本の雷対策に関する技術はまだまだ発展途上であり、「雷が鳴るたびに必ずどこかで停電が起こる」という状態だった。

1950（昭和25）年、亀太郎はこれまでの製品とは全く違った発想で作られた画期的な雷対策の製品「Pバルブアレスタ（避雷器）」と巡り合った。某電力会社研究所で試作されたPバルブ避雷器の製造権及び販売権を譲り受けたが、世の中にない発明品だったために売れ行きは芳しくなかった。電力会社、官公庁など関係各所に足しげく通って提案するが無下にされてしまう。その理由は「製品が画期的すぎる」ことだった。

亀太郎は、Pバルブ避雷器を持って各地へ足を運びながら、製品の良さを伝えて回った。まだ新幹線のない時代、夜行列車に8時間揺られて東京へ向かい、そのままの流れで仙台へ、返す刀で九州の会社にも説明に行くといった日々を、亀太郎は10年間続けた。ひとつの発明品を量産化製品に仕上げる苦難を味わいながら、研究開発費の回収など到底かなわない状況下で、自信を持って作った製品の素晴らしさを寝食を忘れるほど懸命に全国に説いて歩いた。筆舌に尽くし難い努力の甲斐あって、まずは電力会社で採用され受注が入り始めた。その後、国鉄に採用されると、製品の知名度と信頼性が高まり、NTTやNHKなど業種を超えた様々な企業がPバルブ避雷器を求めて音羽電機に問い合わせるようになった。

このPバルブ避雷器のヒットを受けて「雷に徹する」ことを心がけ、音羽電機は日本初にして唯一の「雷対策専門メーカー」の道を歩み出した。



Pバルブ避雷器（1954年製6kV線路用避雷器・左）
配電線（電柱）にPバルブ避雷器を取り替えている様子

「雷と共生する」社会へ

1 955（昭和30）年、亀太郎は本社を京都から大阪市北区芝田町へ移し、社名を現在の「音羽電機工業(株)」へと改めた。国鉄へのPバルブ避雷器導入の道筋がつき、少しずつ経営が上向き始めた頃のことだった。

Pバルブ避雷器の性能と信頼性が認知され始めてからも、音羽電機は慎重に経営を拡大していった。1961（昭和36）年以降は東京営業所・広島営業所を相次いで設立すると、1966（昭和41）年には尼崎工場、1970（昭和45）年には三田工場を設立。その後も九州・青森にも工場を展開し、今では、9つの事業所／営業所、6つの研究・試験拠点と製造拠点を有している。また、技術的な側面でも「雷への対策」を軸とした様々な製品開発を行い、多種多様な業種でその技術が活かされている。

現在においても「雷ひとすじ」という原点からブレることなく、顧客と共に雷ビジネス市場を創造し、社会に貢献する喜びを、社員と共に分かち合える企業を目指し、常に創る楽しさをもって、社員一丸となって「雷と共生する社会」に全力を尽くしている。

現在、同社が取り扱っている製品の一部



いつも社員の笑顔の中心で

後年、亀太郎は会社経営について他人に尋ねられた際、「人とのつながり、人との御縁が大切」とよく答えていたという。創業時には、電力会社の人とのつながりがあって、独立を決意することができ、また、Pバルブ避雷器の開発段階では縁があって製品化の糸口を掴むことができた。そして、そういった人とのつながりや縁に恵まれるために、亀太郎は信頼されうる人間性と技術力を磨くよう社員たちに伝えていた。

また、経営者としては、常に社員一人ひとりの支えになろうと努めていた。同社の50周年誌（1996年発行）には、亀太郎との思い出やエピソードを笑顔で語る多くの社員の姿が残されている。

—『休日出勤の日には、昼頃ひょこっと現れて、大量のアンパンを差し入れに置いていってくれた。

（正直アンパン以外のものも欲しかったが）社長の好物だったから。いつからか、それが休日出勤日のオヤツとして定着して、音羽の文化になりました』

—『社長とは昼休みに何十回と将棋を指しました。運よく私が勝つと「あれはなかなか妙手だったな」と褒めていただけて、非常に良い関係性だったと思います。社長からは名人のサイン入り扇子をいただき、暑い夏が来るたびに、社長との対局を懐かしく思い出しながら愛用いたしております』

亀太郎の気さくな人柄が、音羽電機の社内文化を醸成し、今なお続く社風として残っているのかも知れない。



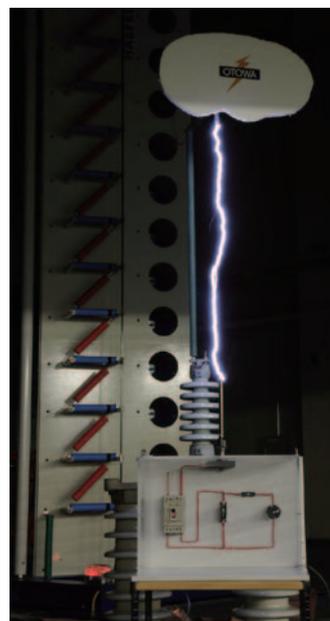
社内行事に参加した際の亀太郎

亀太郎の周りには、いつも社員たちの明るい笑顔が溢れていた。1981（昭和56）年、社長の座を息子・弘孝氏（現・名誉相談役）に譲り、自身は会長に就任した。

雷被害がなくなる世界を目指して

1957（昭和32）年、亀太郎はPバルブ避雷器の開発を評価され、発明協会の全国発明実施賞を受賞。また、1967（昭和42）年には藍綬褒章、紺綬褒章につづき勲四等瑞宝章を叙勲された。

以降、1981（昭和56）年まで、亀太郎は社長として音羽電機を牽引し続けた。現在の音羽電機工業(株)は社員数282名にまで拡大し、日本で唯一の雷対策専門メーカーとして、国内の様々な業界・業種に浸透しただけでなく、東南アジアやアフリカの国々でも雷対策技術で活躍の幅を広げている。国境を越えた支援を行い、これからも「自然の驚異である雷と共生する世界」を目指し、全社一丸となって挑戦を続けていく。



人工雷を発生させる装置(右)

音羽電機工業の雷テクノロジーセンターでは、国内で唯一の宅内サージ検証用模擬家屋、世界最大級の直撃雷電流試験装置、1600kVインパルス電圧発生装置等を有し、最先端の雷対策技術の研究・開発が行われている。



雷テクノロジーセンター(兵庫県尼崎市、2008年完成)

雷対策製品の開発試験や受託試験、各種機器の評価試験を行うほか、雷にまつわる文献やグッズを収蔵した雷ミュージアムを併設。これまでの見学者は30,000人にのぼる。